2024 年２月１日発行

誰かにとって「隣人」であるということ

少し前の話になりますが、12 月のともしびクリスマス小学生の部で、聖書の「善いサマリア人」のたとえ（ルカによる福音書 10 章 25－37 節）についてお話しさせていただきました。

あるユダヤの人が旅の途中で強盗に襲われ重傷を負い裸同然で山道に放置されます。そこを同じユダヤ人の祭司やユダヤ人と友好的なレビ人が通りかかりますが、二人とも見て見ぬふりをして通り過ぎてしまいます。しかし（当時ユダヤ人と対立関係にあった）サマリア人の旅人はその人を見て憐れに思い、傷の手当てをし、宿屋に連れて行って介抱し、それらにかかった費用の全てを支払いました。この３人のうち強盗に襲われた人の「隣人」となったのは誰だと思いますか？と、イエス様は問います。この問いに対して、おそらくほとんどの人がサマリア人と答えると思います。しかしこのサマリア人は襲われた人の近所に住んでいる人でも、親しい友人でもありません。それなのになぜ私たちは「隣人」だと感じるのでしょうか。それはこのサマリア人が、困っている人、苦しんでいる人、助けを求めている人の気持ちに寄り添い、行動を起こしたからではないかと思います。このたとえ話をした後、イエス様は聞き手にこう諭します。「あなたも同じようにしなさい」と。

１ 月の園だよりにおきまして、理事長小礒満より、当法人(雲柱社)の創立者である賀川豊彦が 1923 年の関東大震災の際に墨田区本所を拠点として展開したセツルメント運動の中で生まれた保育事業が現在まで続いていることについてお伝えしたばかりですが、年明け早々の 2024 年 1 月 1 日、能登半島を震源とする地震が起こり、多くの方々が被災されました。100 年前に比べ、被災状況や救援体制が異なるため、雲柱社として人や物をすぐに送るといったことは控えておりますが、今できることを検討した結果、まずは法人として職員から義援金募り赤い羽根共同募金に送金いたしました。たとえ遠く離れていても、困っている人たちにとっての「隣人」でありたいと私たちは考えています。今後も私たちにできることを考えながら被災地への支援を続けていきたいと思います。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

１月に利用者アンケートを実施いたしました。ご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。お褒めのお言葉、励ましのお言葉とともに、様々なご意見、ご指摘も頂戴いたしました。謹んで今後の園運営の糧とさせていただきたいと思います。アンケート結果と回答は２月末までに公開させていただきますので、今しばらくお待ちください。

園長　山田　英